

詩南車

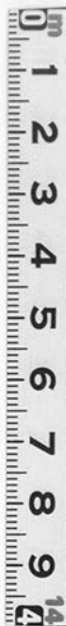
昭和六年一月二十日印刷納本
昭和六年一月二十五日發行

第 六 年

第 二 十 四 輯

磐 城

詩 南 社



南部修太郎氏序
加藤喜雄著

短篇集

蒼い夜の感傷

四六版美装・頒價五〇錢・送料四錢

再び戻らぬ若き日の清純な感情の流れ、そこに描けるもの其の名の如く淡い憧憬と感傷に終始するかも知れない而し彼の熾烈な情熱に秘た純藝術の良心をわれわれは否定し黙殺する事は出来得ぬであらう、少年期から成年期にかけて過ぎゆきし彼の足跡を見よ。

東京市外上目黒二〇二一

發行所 白路社

福田正夫氏序
吉田良雄著

詩集

淋しき風景

四六版厚表紙 頒價八拾錢 送料四錢

心より心へ 返らぬ面影
孤舟 別しき夜道
心つきぬ苦しき 淋しき風景
夜なき春の 窓から抛げる
夜なき春の 窓から抛げる
夜なき春の 窓から抛げる

東京府在原町小山一四六

發行所 曉聲文藝聯盟

詩南車 第二拾四輯

題目 次

題字 巖谷小波
歌 永山徳一
雲 森田忠秋
鎌倉朝暮 島田満夫
街頭の海 新妻久満
詩 高久晩霞

屍 マルセル・マルチネ
花・船・その街 栗原孝太郎
練兵場 八十島 稔
山頂にかく 瀧澤史朗
七月の 且野草笛
小田原から 中山世志子
ひぐれのうた 月丘てい子
こわれかけた 根本信義
涼臺の詩 根本信義
海水浴場 えとうさぶらう
反動 唐木登志

港街夜曲 深川秀那
十一月叙情 芹江比呂志

短歌七人集

冬 浅間山
秋 冬から春へ
秋 寂れた會
秋 寂れた會
秋 寂れた會

木兎集

鈴木 青路
鈴木 青路
鈴木 青路
鈴木 青路
鈴木 青路

革命詩人の死に就いて 片寄 歌二

磐城刀劍會即詠 酒井耕影
詠 志賀みやこ
詠 萩原たけ
詠 柏木哲

みち霜 佐々木阿起羅
歌帳より 石川梅子
冬木集 市川健次

生業 島末真之
森の歌 片寄 歌二

雑草 双葉 清
安息日の午后 藤村 青一
走馬燈から逃れる 勢山素太郎
地獄の佛 神田 敬
Kへの或夜の 光山 禮一
頭蓋骨のない窓 片寄 歌二

消 息
寄附詩書紹介
編輯後記

雜 詠

永 山 德

一 2

十和田湖に遊びて

斧を入るゝことたになくはかくはかりはしき林となるへきものか
焼山といふ名にも似す密林の木立打ちつゝき果しもしらず
自動車の進みゆくまゝ瀧の數かそへもあへす右にひたりに
分けて來し林はかつと打ちひらけ十和田の湖水いま目の前に
緑玉を碎きし湖に雪のこと白浪つくり船は進むも
そゝり立つ松の梢も分けて行く水のおもてもひた青きかな
筆をもて描きも果てす言葉もて言ひも果てさり島の景色は
歳千代を十和田の湖水かく碧く十和田の松はかく榮ゆらめ
陸奥の國に旅して十和田たに見てし過ぎなは足れりとそおもふ
この湖を百度よきり百たひをかへり見るともあかしとそおもふ
群青の十和田の水を思ふとき鳥影ありて目の前に湧く

雲

森 田 麥 の 秋

(折々に詠める雲の歌を)

富士方の空よりのびくるうろこ雲高くかかりぬひんがしにまで
うは雲と下べの雲とわかれ見ゆさやかなるべき月を浮かせて
秋ぞらにうかぶ白雲わがこころ空しきときし見れど飽かなく
没り日ぞら領めてにわか湧きあがる雲曼陀羅に彩なす御光

國原の巽荒れ雲はしりすぎぢながらに日照雨ふらすも
川上にたゆたふ雲の夕焼けてほそき流れはあけを流せり
下野の山嶺に湧きし雷雲に迎ひ風立つ常陸國原
潮騒のたかまるまに朝あけて海のうへにはにこる綿雲

鎌倉朝暮

島 田 忠 夫

冬 厨

夜ごとわがひとり起きゐて厨べに水落すこそ寒けかりけり
水ささむ藥鑪は提げて入り來つれたぎりのこれる音のかそけく
ひとり居の冬立つ厨荒れにけりこの夜は板の冷えわたりたる
ひもじさに吾もの欲りてまづしさや味噌がめのなかの味噌もとしき
くりやに物音をぬすめり一人居の夜ふけて何かたぬしと云はむ

獨 居

あかどきの時雨や降りてぬらしたる庭の落葉に日はさしにけり
軒下に七輪つかふ朝々の炊ぎのわさも冬なれにけり
み冬立つ庭荒びけり龍のひげの碧實こよう凍みてこぼるる
晝たくる小戸をあくればうら山の深もみぢに冬日さしつづ
磯ちかき水汲みなれて手は荒れし顔ぐすり塗る夜々をさびしむ
電車に乗りていでくる谷の道あさあ霜をおきそめにけり

極樂寺村

一人居の家をあした出でゆくと火いましむるたぬしさはあり
ひびかひて電車は過ぐる冬やまの谷あひ赤くもみぢのこれり
初冬の村しづかなれや家々に大根しろく掛け干せる見ゆ

街頭屬目

新妻久満夫

行きとほる家並のは影あかあかと年深き町に三日市張る
物並めておけるあかりのかがやかさ夕さめきて暮の市張る
夜の雪淡らに降りて街をゆく馬車のあかりのおぼろなるかも
軒暗く木枯の風吹くからに砂捲く町を行きかてぬかも
夕されば丘根吹きくたる木枯の町に入りつゝ砂捲きて馳く
軒たかくほこりたなびき心がなし昨日も今日も木枯荒びつゝ
久しく北海道に住んでゐた弟が千島列島を視察して一人旅をしながら歸省した

北の國の千島の磯に寄るなみも聞かずやあらむ。汝に歌なし
國遠く歸れる吾子を養へさむと下笑ましさに母は魚焼く
長途を家に歸りて弟はかの國語りほがらなるかも
人も家も疎き千島の丘根いくつ馬背に揺れつゝ旅しつらむか
驛の馬の背搖に篋分けて千島の奥の夜を越せしてふ
冬されば深雪ふりつみ住み憂かる北海道を語り聞かすも
男の子疎き家に歸り來し弟の旅の語りに小夜ふけにけり
家離り遠國住の子の語ふを笑み膽りつゝ親は坐にけり

豊間の海

高久晩霞

燈臺を見つつ波間に子等と居て吾も現世をしばし惱まず
此景色此の水を得て何を得む心ゆくまで夏を遊べ子等
高く來し潮去りて行く一ときや岩の遠こち急端走る
わが宿は村の銀座に浴場に近ければ子等も晝夜を憊ます
此村の銀座の夜をさすらへば路凸凹に行人罕なり
磯に立つうしは煙りに包まれて麓の村は静かに暮るる
或時は村の端山の三日月にふと涙して夕磯に立つ
或時は深き愁ひの湧き出でゝ青海原のきわまり知らず
踏占めし大地はかなし吾が砂も波のまにまに足裏を去るも
うしは浪高鳴り止まずこれよりは風ぐ日少しと明日かも去なめ

歸省

秋草の枯れ伏す中にちゝ母のおくつきところ冷え冷え立たす
この宮に來て遊びにし幼などち分れし今日を知るよしもなし
われ遂にわが古さとの此家に歸り住まぬ淋しと思ふ
潮の音に温泉宿の夢の成りがたく雨戸を押せば月明りせり
あかときの温泉の街淋し濡ぬちに宿の灯淡く光り並べる
虚空藏の御堂ゆ出づる鐘の音は山河を掩ひ股にひびく
澄み渡る御堂の鐘の折々に暮れまく惜しみ縁に立てるも

屍

マルセル・マルチネ

栗原孝太郎譯

あの暴虐世界と闘つたお前たち

お前達は 何と云ふ目に遭つて了つたのだ

消える希望をかき抱きながら

あの はかり知れない力と闘つたお前たち

ちり／＼の力を献げ

悲惨と孤獨とを献げ

なげなしの財布を献げ 絶え／＼の生命を献げた

お前たち

あの巨きな夢のはか何一つ持つてゐないお前たち

あの巨きな夢を あの抑へきれない夢を

あの高い信念を そして

あの怖しい愛を献げつくしたお前たち

あの愚にもつかない戦ひに馳せ参じた無分別な戦

士たち

おゝ敗北者よそして 来るべき勝利の征服者よ

ガンジガラミに縛りあげられて

お前たちは 嵐のなかに投げこまれたのだ

頭のなくなつた戦士たち

頭に見放された戦士たち

俺はこの目で見たのだ お前たちが出かけるのを

氣の抜けたお前たちの心に なほも反抗を燃やし

ながら出かけるのを

お前たちの夢を失くしてまで生きながらへるのが

厭やさに

お前たちは 奴等の戦争に出て行つたのだ

花・船・その街

八十島 稔

鴨たちは青い波の上で街からの賓客を待ちほけて

ゐる

それなのに花・船・その街はなぜか霞に消えかゝ

つた。

鴨よ人間は夢をもがれたのだらう。

ある海にて

深いもやをわたつて私の船はかくれる

青い海草もこの船に巻れた

もやの中で結ばれた手よ

この温かい若冠を明日は何處かの岬で見よう

練兵場 (七月の)

瀧 澤 史 朗

軍服にかつきり浮き出された

汗汚!

れん兵場

兵士達は午後の強い陽ざしに

草いされの中で鋭い郷愁を低いでゐる

夜

一つの墓石にひかる夜露は新しい搭婆の匂ひを

吸ひ込むだ

獨りで死んだ戀人の瞳が墓場の影で揺れてゐる

白い柩の中でむかしの私語がするか!

によつきり立つた搭婆の夜露を僕はちい—と凝視

めたまゝ死ぬ事を希をは

山頂たかく

且 野 草 笛

つきの夜——わたしは

山頂たかく破れ旗をかかげよう

今日も太陽がおんなじ軌道を通つて過ぎて行き

しる雲はやはり悠久の歩調をかへないで

さりぎりすのやうに疲れてしまつてゐるわたしの

心に

あをあとをつゞく日暮れのかぜのほさを光らせ

ほつかりと 今宵はまた

なんとこゝろうれしい月の出だ

いつか蜘蛛の網におきわすれてゐた

きよらかなかんじようの

ほのぼのとよみがりくるをかんじる

ひつそりとてる月を背景に

わたしは破れはてたいつぽんの旗を

へんぽんと山頂にひるがへそう

小草がさいろい夜霧をはじいて嗤はふと

泪よ さんと昨日のゆめを浸せ!

くろぐろと塗りつぶされた生活の目標を倒し
つべたい墓石の意志の上に

傷だらけだけれど

わたしはいつぼんのわたし自身の旗を
月明の山頂たかくひるがへすのだ

七月の小田原から

中山 世志子

七月の太陽の直射は

飽満しない胃袋をかきみだすのだ

唯四圍は青臭く

目立つて清澄な空気がいやなのだ

今日は濱松から

今日は横濱から

今日は大阪から

今日は東京から

小田原には都會の汚臭の附着た代物が

廉價特賣の名策を撒布し乍ら

忙しく金を吸収してゆく

× ×

お濠の蓮の花が咲いた

櫻樹の下で霧雨の降る朝

蕾のはちける音に

呼吸をつめて幻想を讀むと

切々と心音に響合するものがある

海上は渺茫と惱亂の花粉を撒き

裸像は導火線となり

生命は奇しく躍動する

× ×

草いきれに深々と身を心を沈淪させ

想像は果てしなく壞顔してゆく――

夢は壯絶なのだ

おゝ なんと若々しき粉飾よ?

明日は又不完全な燈火による女……

ひぐれのうた

月丘 てい子

燕はひくゝ雨にぬれてひかつてゐた

あの町々の灯がつつきだした

別れることを惜しんで子供らは手をつないで歸た

人形は子らの背にかなしくぬれ

母がとつて來た赤桃を一つ一つはゞばつてゐる

子らは明日の日に新しい計畫を樹てゐる

青々となびく稲田の穂はゆつたり垂れてゐる

燕は遠くないでひかつてゐる

わたしは生きてゆくことをかんがへてゐる

雨はしろくしろくしめやかに降つてゐる

こわれかけた涼臺の詩 A

――夏の夜のスケッチ――

根本 信義

夏の夜は

溶解炉の中に呻吟する 蒼さめた人間は

大地からくる 涙露に救われうつくしい昂奮をよ

びおこす

こわれかけた涼臺の上に眞裸体になつて

傾きかけた月光を浴びて

納豆のように くさい体と 萎れ落ちそうになつ

た魂と怠惰な土息を吐きだそう

あゝ爽快になつた

これで明日の監獄部屋の勞働の準備も出來だよ

綠陰の風景

こげそうな空 火山灰のようは街路

峯の上に 雲を超えた鷹が四羽

大王のようにブラチナの翼をうづまきに巻いて飛

翔してゐる

おゝ 若きかのひとよ

僕は 僕の想念は疲れ おとろいてゐるから

永い倦怠をふり落すために

ひとつあの翼に乗つて 未踏の處女地に

遊びたいと思ふのだ

善微の花は凋れる

純白な ばらの花に 蝶は親切そうに偽満的な媒

介の言葉をかけて

うま酒に酔わんとしてゐる

蝶よ 近寄つてはいけない

禁園のばらの花なのだから

あゝ喰つてはならぬ ものを喰つてしまつた
明日はあの美麗な花も凋れ散るだろう

海水浴場

えとうさぶらう

猫の目をした貴婦人が長い睫にもの云はせ
寝こんだ日傘の毒の華
妖魅の精射が飴のよう

(泳ぐのはもう流行らない)

談話室の偽善者

日曜には神聖なる教會の司會者を務めます
土曜には遊女が吐き出したいろんな花の芳香に夜
をとんと失念致します
このように外面と内面には貧慾な人工光線が交錯
してをるんです

世の中はまだまだ狐の遊戯場なんです

反動

唐木登志

蟻が結んだ力に依つて
彼等の住家が築かれた

黄金のてふぶるの下で

「バレンシヤ」が故郷を想つて泣いて居る

メリケンの黄金人間が黄金禮賛の歌を唱つてゐる

ふと迷ひ込んだやせ犬が奮然として絶叫したが
きらつと光つたふおうくにへな／＼になつてしま
つた

指揮者は熱叫した 指揮棒が然え出した

「港街夜曲」は正しくくらゐまつくすに達して

港の汽船が踊り出した
ぼつふどへやあの眼が虎になり

十一時のとらうざあすがうねつて居る

「港街夜曲」は自動車に 電中に段々消え出した

十一月叙情

芹江比呂志

生活は恵らはしい雨の中でもひろげられた
あえぎつゝ よろめきつゝ

病める身を街へはこびゆく私は

誠意ある團結が 彼等の食糧^カを生産した時
人間の手が 彼等を倒壊した

彼等は誓つた

プロレタリアは再二築いた

見よ!! 桂は腐癢した

正に轉落せんとする 資本主義社會を

港街夜曲

深川秀邦

やせ夫は眼を光らし口をさき
フラ／＼さ迷つて居る

旅鳥は朝から酒漬になつて居る

汽船の汽笛に一瞬に電氣がとび出して來た

さあいよ／＼指揮棒は振られたのだ

シニバルが我鳴り大鼓が怒鳴り

フリユートが悲鳴をあげピアノが絶叫し

バイオリンが、クラリオネットが

淫奔な「港街夜曲」

雨中餌を求める山鳩の様な存在なのだ

高く 白く 果てなく冷たい壁である

それは雨に濡れたビルディングの大理石であつた

が 運命の泥土にみたされたみちすぢの

白い防壁の様に想はれた

十一日の雨に濡れ乍ら

すべてをあきらめて 私は

さびしくも 黙々と生きてゆく

まこと 病める人生の山鳩なのだ

冬

小暗い光りの下で

賣りのこされた野菜がうごめいてゐる

まつたく生氣のない風貌

それは寂しさを嘆く蒼ざめた冬の横顔だ

寒い街路

雪空の下を囚人がゆくあの囚人の青ざめた手に
手錠はいたく冬錆びてゐる

浅間山

岩波千賀子

故郷近く汽車は入るらし桑畑の
續く限りを吾がたのしめり
桑畑の續く限りの高原の故郷近
く吾が汽車走れる
入日さす落葉樹林あざやかにあ
かさうるしの葉は輝けり
晝深き高山路の静もりをひとり
して路葉かそけし
目のあたり雲にかまがふ白煙り
見つゝあれば心ゆゆしき
(浅間山)
うら枯れし草みふ行けばあしも
とにわびしき音を立てゝくづれ
る
青桐の廣葉照り透す陽の光りつ
くゝ見ればにぶけくなりし
冬光りななめにさて向山のひだ
のかさなりあらはに見ゆる

冬

石坂貞子

冬枯れの野よりながむる山脈は
白くつらなり白くひかれり
停車場の壁にもたれて賣店のみ
かんみつめるさむき朝かな
しと／＼と雨の降りくる町中を
電車走れり灯のころ
名も知らぬ小鳥來りて餌をひろ
ふ冬の朝の雪どけの庭
傷つきし小指うづきてめさめけ
り静かに更けし冬の夜かな
秋刀魚やきつゝ秋も最中になり
けると語らひつゝも夕餉にむか
ふ
栗の實のはじけて落つる音きこ
ゆ淋しく澄みし山の秋かも
冬から春へ
大平松夫
裏山に杉伐る音のたまたまにひ

秋

鈴木磐舟

びきて暮るゝ雪の一日
日ならべて雪晴つゝ此の日頃
楠の大木に目白來て鳴く
雪解のゆるみに山の崩れ來て大
なる岩道中に立つ
そゝり立つ岩山崖のひとところ
青く見ゆるは馬酔なるらし
カナリヤの囀る聲の春めきてこ
の朝明の静かなるかも
峯かけて色あざやかけく咲きか
ゝるつゝじの花のこは名所
小雨降るこの朝明けをゆくりな
く鶯なけり裏の小藪に
(川前)
秋たけし清き月夜の野を行けば
淋しかりけり夜鳥の聲
亦ら引く夕日を追ひて野を行け
ば我が足もとは早や暮れそめぬ

懷疑

えとう。さぶらう

おもへどもおもへど海ははるか
にてわがかなしみをやるにはか
なし
こうなにかむねにつかへる懷疑
ありてとけざるまゝにいくつき
かへし
まよいの子またながれきしこの
ところは自我のをきてにのがるす
べもなし

かるた會

木野もと子

かるた會 夜ふけのまちの 静
けさと 凍つた月を せおつて
もどる
冷える夜だ 風も吹かぬに か
ら／＼と 下駄の齒音 訝える
夜の まち
背の子を やつとねかせた 田
舎道 ひつそりかんと 夕日が
沈む

木枯

水町冷子

死のことさしゝまの中に芽えて
あり木枯風ざし二日夜の月
夜をこめて木枯の荒ぶ音なり
急行列車の汽笛かなしも
冷えびえと寒き夜かも部屋ぬち
にぬくもりてみかん食めるうま
さよ
夕陽に映えてオレンヂあざやか
に蜜柑實れり田舎家にして
木の實あまた店頭にあれど吾が
好む蜜柑の色の落付きし色

木 兎 集

鈴 木 青 路

谷のみちふかく入りきて物の音たえぬと思ふに嶺
を吹く木枯

ひよう／＼といつやむとしもなき木枯の昨日も今
日も窓を打つ音

町角の店にみいけし蜜柑かも今日子供らのひたに
欲する

箱 崎 むらさき

點々と君と我とは歩みけり木枯の吹く冬の野の道
今こゝにうたう歌なく冬の夜こたつによつて木枯
をきく

培ひし賤かこゝろの豊けさを窓べにふとる蜜柑に
ぞしる
星かけを鐵にかつぎてかいこし翁はほゝゑむ庭
の蜜柑に

池 上 富 司

富ちやんと寝るんだといつものくせであまへてく

鈴 木 明

日ならべて晝頃よりぞ雲出でて木立どよもいし木
枯の吹く

いち早く育てぬきたる蜜柑には祝ひの歌を書き参
らせん

木 田 す み れ

夜業終へてかそけくなれる火を見つゝ一人寝る夜
ぞさびしかりけり

静かなる村の大道音高しひた走り行く自動車のあ
り

裏庭に仕まい忘れし作業着を月照り出でて見えだ
しにけり

久々に村の母校を訪れてありし其日を語らひにけ
り

鈴 木 茂 子

君と二人歩みつかれて夕せまる木枯の荒ぶ野に佇
めり

庵とふ人の微笑みて蜜柑のめぐり幾めぐりせし

る可愛いミイ坊

何故富ちやんと寝るのときくにこたへずお話しし
てよとせがむミイ坊

富ちやん——ねんこと云つてくるミイ坊は赤ちや
んある母とのねんこをもうあきらめて

唐 木 登 志

思ひ出を放歌にする廣い堤の歸り途

宣傳の囃子を甲高い夫の吠聲が貫く夕暮の街に

老けて見えた妊娠女を「お婆さん」と云つて微笑ん
だ

生活にか藝術にか、群集の前に踊る女性の眞剣な
るを見る

綾 小 路 雅 夫

酒の味煙草の味も知らずして淋しき家にわが生い
立ちし

悔おほき吾が半生をふりかへり見るによしなく秋
に入るかも

汗まみれになりて働きふと吾にかへれば悲しいつ
はりの多き

丹 野 晴 夫

病氣を得て床にある身の淋しくも今日を一日木枯
の吹く

夜更けて未だ木枯吹き止まずあんなの笛のたへだ
へきこゆ

清 野 小 菊

小夜ふけて戸の面しきりに木枯のふく夜は淋し君
を思ひ居て

今日と云ふ日も亦くれぬつとめ身は家ちに向かふ
たのしさを待つ

只一言君に言ひたきことあれど一人悶えて今日く
れゆく

江 名 や す し

白々と月芽を居れるそば畑のつゆは一しは光りて
ぞ見ゆ

さ庭べの萩に宿りしつゆ玉のこぼるゝ花と共に落
ち居り

革命詩人の死に就いて

片 寄 歌 二

社會は今夜明け前だ。一つの社會より別社會への轉換期、巨大な生みの苦しみに悶えてゐる社會の母胎内には個々様々な無数の苦悶、悲劇が包容されてゐる。そして鏡中、その最もデリケートな感情世界で吸収し盡してゐる、牢乎として抜くべからざる舊世界の感情、舊世界の教養を何處にも振り捨てようなく、而も同じ感情のデリカシーから、逸早く新しい社會的感情を豫定して、其處にたまたまない程の焦燥を感ずる詩人の心理的事實は、別けても大きな運命悲劇である。

舊世界に屬する良心的詩人の社會的苦惱をかやうに分析したところ、私は一瞬間たりともこれを是認しやうとするものではない。全世界の前衛階級がいま、命を的に歴史的役割を引受けてゐるこの血腥い闘争時代に、個々的に見た詩人の悩みは贅澤な話だ。

だが――、新しい社會の到來が近づくに従つて、右のやうな煩悶が、自由主義に立脚するインテリゲンチヤ一般の社會的心理を代表するものとして、私たちには見逃すことの出来ない社會事象である詩人生田春月の自殺、根本的動機は此處にあるものと斷定して差支へない筈である。

かつて、ソヴェート。プロレタリア詩壇の巨匠といはれるマヤコフスキーの自殺はソヴェートロシアは勿論、全世界詩壇に大きなショックを與へた。

斷るまでもなく、マヤコフスキーはロシア詩壇に未來派の創始者である。そのスケールの雄大さとそのスタイルの強靱性と、その韻異性とは、本來のロシア詩壇に異例な存在であつた。

プロレタリア詩壇の巨匠として、動かしがたき聲望を負つてゐたマヤコフスキーの強靱な存在は然らば、何故に忽然として失はれねばならなかつたか？

生れて十三才にして既に生活戦線の中に漂ひ、その社會的活動から年二十才に満たずして二度も投獄の経験をもつてゐるマヤコフスキーの経歴は、その生活から見れば生粋のプロレタリアである。併し乍ら、現段階に於けるプロレタリアの世界に自殺といふ行動があり得るであらうか？

若しも一個の人間が、言葉の表す最も純粹な意味でプロレタリアであるとするれば、彼の世界には、一般的には斷じて自殺といふ行爲はあり得ない筈である。然らばマヤコフスキーのとつた自殺なる行爲は、彼が生粋のプロレタリア詩人でなかつたことの證左であり得るであらうか？

茲に私達にとつての大きな問題は、一個の人間の出生がいかにプ

詩南社 秋季短歌會詠草

詩南社主催第三回秋季特別短歌會を十二月七日午後一時より

平マルトモホールにて開催、參會者三十余名あり、最初宮田同人の開會の辭に次いで永山徳一、新妻久満夫兩氏の歌に關する講演あり終つて兼願「木枯」一みかん」に就き參會者の記名投票を以つて各二首宛互選し之を批評して後夕饗を共にし六時盛會裡に散會した。當日の詠草差の如し（註編輯の都合により一首宛掲載）

「木 枯」

木を裂きて風ひた走りうらがなし家深くわれは思づきてあり
新妻久満夫
すゝり泣く声の葉ずれやみに聴く今日木枯の立ちそめにけり
長谷川太郎
ひら雀こゑもみだれても寒く今日こがらし立ちそめにけり
江藤三郎

木枯の吹くや二子の山裾に曾我兄弟と虎御前の塔
永山 徳一

更くる夜半さ庭に立てば木枯に星さむ／＼と震ひまた／＼と
野口 漁夫

木枯の巷に据えし慈善鍋小錢疎らに砂の溜れる
草 野 牧 笛

消には葉の吹き拂ふ冬木立こがらしさむく鳥飛びにけり
佐々木 顯

日暮るれど木枯止まず板戸打つ音のすこさよ子を抱き寝ん
永山 柚山

木枯の荒める夜半はなか／＼に夢安からぬ闇の中かな
千葉 萬 峯

鐘の音に目覚めてみればいつしに木枯止みて朝のかそけさ
阿 保 俊 輔

木枯の目に日に荒れて名にしおふ磐城の冬をいや深みゆく
松崎 幽 泉

蟹が家夕せまり來て木枯のおち

ロレタリヤの背景を負つて居り、その社會的活動がいかにプロレタリヤの外見を伴つてゐるやうとも、彼が純粹なプロレタリヤ魂（科學的社會主義の教理に基づいて世界を變革せむとするこの意志）をもたない限り、決して眞正のプロレタリヤではないといふことこれであり、反對に彼の社會的環境が如何に非プロレタリヤ的外見を具へてゐるやうとも、尙よく一個のプロレタリヤであり得るといふことこれである。

マヤコフスキーがソヴェート・プロレタリヤ詩壇に貢獻は勿論大きい。併し、その功績はむしろ、彼のルンベンの反逆性に出發する強靱。生新な形式の方面により多く係つてゐるものであつて、内容方面は寧ろ第二義的でしかなくたと私は思ふ。

マヤコフスキーの藝術的閱歷をば仔細に点検し、そして最後にその自殺に思ひ及ぼす時、私たちは、彼の本質が遂に、社會人として一個のルンベン、プロレタリヤであり、詩人としては異彩を放つ形式藝術の創始者であつたとの結論に到達せざるを得ない。自殺なる行爲を、私達の眼は常にもつと本質的に存在する社會的根據を探求せねばならない。戀愛事件にその原因を置くと言はれる彼の自殺は雄辯に彼のルンベン性を證明するものであり、そして一方、現段階のソヴェート藝術に同伴し得ない、彼の藝術的破産を物語るものでなければならぬ。

天才的ソヴェート農民詩人として世界の詩壇に驚異の眼を瞞せたエセーニンの自殺、少し溯つては未曾有の都會詩人として革命ロシヤを風靡したアレキサンドル・ブロークの藝術的破産、そして最後には巨匠マヤコフスキーの最近の死、——戦時共產主義時代の社會的擾亂にその藝術的對象を置き、混沌の彼動によつてそのテムボを合せ得た大きな詩人達は、秩序ある建設期に入るに従つて著しくその詩的生命を失つてしまつた。

詩人の本質に深く根ざしてゐる個人主義、ルンベンの反逆性は彼の才能がより大さば大さきだけ、そこに相對的危險を同伴してゐると言ひ得る、社會的混亂に乗じて一時的にはそのルンベン騷擾性を燃焼させることが出来ても、その生命は只一時的同伴を可能とするだけであつて、彼の本質はより危險な前途を約束されてゐることを私たちは知らなければならぬ。

雜詠

(口語歌)

片 寄 歌 二

霜とけてしまに乾く草もみじに雀が下りて何か云つてゐる
青菜が霜にくるまれて眼も寒い山にゆく通りの路端
鎌をつけた竹を擔いで野葡萄を取らうと連れ立つてゆく赤い山道
新しい家一つ殖え冬目に井戸堀る土が道に擔がれる
遠山に雪はの白く冬來て落葉焚く火の煙ぶつて居る
晩秋の野良にむかつて眼を投げる風が揺れてゐる木の葉が揺れてゐる

ゆく波に千鳥なくなり

武田美佐子

天深ふ湯の嶺嵐しひたすさび太
平洋の浪は高かり

柏木哲

なやましき心抱きて歸り來し深
夜の町に木枯の吹く

瀧澤一郎

落葉せた櫛の樹肌の白さへま近
くなつた木枯吹く

片寄歌二

文讀みて静けさに居る室の外を
木立どよもし木枯し荒む

高久晚霞

そのなき深き暗夜の静けさに
吸はるゝ如くこがらし吹け居り

佐藤清長

背戸のべの簾吹きある木枯のさ
むむとして夕さりにけり

大平松夫

庭隅の落葉の山は木枯の一夜吹
きたる名残とぞ見し

只野清

日並べて荒さふ木枯大海に收ま
るらしも鷗群れ飛ぶ

吉岡獨歩

夕されば木枯の風静まりて松の
はやしにのこるあかるさ

明石濱男

吹きすさぶ夕木枯しに啼く雀森
の消は寒むくしあるらむ

佐藤正美

障子たてゝ陽のぬくきりにちつ
と聞く木枯に葉の轉がりの音

柁川冬天

「蜜柑」

紀の國の遠き思出や實豊けき蜜
柑林の青々續きし

高久晚霞

打迎ぐ空のふかき山畑のみか
んこゝだくいるづきてをり

武田美佐子

南より来る客らし網棚に枝折り
添へし蜜柑籠あり

草野牧笛

こみどりの葉に數知れず黄ばみ
たるみかん好ましく子等見入り

佐々木顯

玄關の我が靴音に吾子二人、手
に手にみかん持ちて出て來ぬ

柏木哲

磐城刀劍會即詠

酒 井 耕 影

研き澄みし刃の光りひらめけは大和み魂のとふともあるか
苦しさに耐へて笑顔に物言へど同じ思ひに惱む我かな (訪病弟)

雜 詠

志 賀 み や こ

ゆけどなほ道はつせずわが足にふみし千草のいとほしきかも
ひろ庭はところせきまで落葉して風ひや／＼けく秋逝くらしも
世の人の幸あるごとく見ゆる日やひとりさみしくわがさだめおもふ
み佛に花をさ／＼けてあら立ちし心の波のしづまりてゆく
み佛にまゐらす花のそこばくはこの狭庭にもめぐまれてをり
わがいのち夢も迷も多かりしすぎ來しかたのしたはしきかも
ひさ／＼に折々大人のうたよみてかのみおもてを思ひうかべぬ
さまさまのあらましこともすぎきぬかくして年は果て／＼ゆくらし
寂しきよゆめを描けるかたほよりおのづから夢のくづをれてゆく
若き日をはたらき生くる身のさちにあさ／＼こゝろ朗らかなるも
文よみつひとりしあれば雪の夜は世にさかりたる心地するかな

萩 原 た け

木枯や白く光れる野路の邊に老ひさらばへる物乞一人

吹く風に木の葉おほかた散りはてゝおのゝきてぬぬあはれ枯草
みかんとし聞けばおもほゆ紀の國や文左工門のいさましことを
みかんとてまゝこと遊ぶる子等の脊にあたりてぬらし冬のたまり日

柏 木 哲

詩南社の締切愈々迫りければ今日もかにかく氣にかかりて過ぎぬ
考古學全集を繰る山田氏と石を撫でる西村の邦さん
この石のこの窪みは何玉を彫りぬきしかと友の云ふなる
晩酌の二本は終えぬ城山の鐘を聴きつゝいねんとぞ思ふ
定員外を乗せて平氣な自動車の運轉手をば心にくみし

佐々木 阿起羅

梅雨霽れに朝日をあびて木陰行けば木の葉はゆれてあき風涼し
さ夜ふけてふと目さむればさはしくトタンの屋根を雨た／＼く音
新妻のいろの白さにくろかみのまげ重げなり心はぢらふ
病院の夜のしづけさいま友のかひなはあけに染まりたる見ゆ

み ち 霜

石 川 梅 子

もや晴るゝ峽の小路の朝明けにふみて寂しき落葉の音かな
何人のとほりしならむ路霜のとけたるあとに落葉みだれしけり
日の光りわずかに照れる峽間みちゆきつつさびし山鳥のこえ

包み破りてみかん数ふる幼子の
まわらぬ舌に喜びの聲

阿保 俊 輔

霜月の風に吹かるゝ丘畑のみか
んに光かる陽ざし弱かり

大 平 松 夫

市終ひし跡の淋しさ遠近にみか
んの皮の散らばれるかな

永 山 耕 山

みかん籠重げに提げて女の童は
ゝ笑み見上げ立ち添ふ母を

佐 藤 政 美

跼まりみかん喰べてる女の子前
があらはだ砂付いてる

片 寄 歌 二

冬ふかみみかんあかなく吻ふ吾
子の小さきこよびは黄にそまり

明 石 濱 男

たあいな難淡はやめて目の前
のよくうれたみかん／＼はんと思

池 上 富 司

たそがれの巷に立てる露商人み
かんを賣りて今日も過すか

えとうさぶらう

駿河路ゆ越え去り行けば近つ村

遠つ小村もみかん熟るゝ見ゆ

吉 岡 獨 歩

店先にならぶみかんの黄金色三
文店の明さを増す

千 葉 茜 峯

うちわたす丘のなだれの日だま
りにあらはなるかもみかん熟れ

新 妻 久 満 夫

分教場は生徒の数も少なけれど
ゝ二箱のみかんにて足り

永 山 徳 一

柔かきみかんをむきて口にせば
みかんやかに舌を潤す

松 崎 幽 泉

山里の段々畑のこのもかのもみ
かんうれれ居り小春日にして

只 野 清

ゆづ賣の爺はサンタに似たりと
も妹らたのしみゆづかひにけり

宮 田 青 波

月の影ほのかにかゝる庭隅に枝
もたはばにみかんのなるも

長 谷 川 太 郎

めざめぬて聞けばしみじみ寂しかり遠潮騒のかそかなる音
さかりぬてしとしは戀し月の夜もしぬびつゝ居ると人しらざらむ

歌帳より

問 野 碧 峰

おの手にはじめて植えしトマトウのあからみ初めて今朝は嬉しき
にぎやかに語りし友等皆いねてたゞきこゆるはせゝらぎの音
今日もまた雨と思ひて起きけるに朝日さしぬて嬉しかりけり
日記くれば去年の今日なり今は亡き友と連れだち海に行きしは
山の寺たゞ静寂の庭の面にひとと咲けり姫百合の花

故郷に行きて

佐 藤 淡 雪

久にして母の御墓にぬかつけば見渡す枯野ただにさびしき
家毎にうれし柿の實鈴なりて平和なるわがふる里の村よ
故郷に歸れば親しき友等來て昔語りて時過ぎにけり
中學の試験準備に忙しき吾子はも悲し心鋭く居る
汝の行手道は峻しく程遠し只うつそ身のきづ附かで當れ
賣出しの赤旗ならふ軒毎に客少きも淋しかりけり

冬 木 集

市 川 健 次

心はりつめもの讀みてをりにしか庭木さむざむと雨ふれる音
庭土に音してふれるけさの雨や底びえしるく冬めきにけり

冬ながら照る陽の光りぬくとし
く店に轉じるみかん艶せり
佐 藤 清 長
たつた一ツ葉のお盆に残りたる
橙の實の寂しき色かな
市 川 冬 夫
くつかりと橙の實の浮き立ちて
色をなづめる黄昏の影
瀧 澤 一 郎

レコード演奏會と舞踊の夕

詩南社主催のレコード演奏會
と舞踊の會を去る七月二十六日
夜六時より平町聚樂館に於いて
開催、入場者千五百名を超え、
文字通りすし詰の有様で非常な
盛會をきはめた。當日舞踊出演
者は永島佳子、平野井光子、關
内敏子、大島綾子、大谷敏子の
諸嬢で、尙大輪花輪八個、花籠
二對、花水柱一個をそれ〴〵寄
贈を受けた。改めて紙上で厚意
を感謝す。

□ 消 息 □

宮田青波氏去る十二月二十日小
谷喜代子氏と華燭の典を擧ぐ、
尙同氏の祝賀會を詩南社主催で
二十四日「コンパル」に開き、出
席者多數ありて盛會をきはめた
佐藤正美氏 福島毎日新聞社に
入社
野田菊雄氏 詩集「風烟の街」を
近日出版
淺海與三男氏 白路社主宰氏の
第二詩集を一月出版の筈
松本純一氏 去る八月十六日
死去、詩南社で同氏の靈前に花
輪を贈る

受 贈 書 目

短篇集 若夜の感傷 加藤喜雄著
詩集 トルソー 田村榮著
詩集 淋しき風景 吉田良雄著
詩集 戀の横笛 上政治著
詩集 虹たち 岡島照枝著
民謡集 草の實 石井白葉著
寄贈同人雜誌深謝
白木風葉著

生 業

島 末 眞 之

耕牛の歩みおそけれど我さへや疲れし思へば叱りかねつも
濡れそぼちて田を鋤きおればたまさかの雨の日を休む友の聲きこゆ
疲れたる牛も歸へりは嬉しきか夕の坂を降り早しも
牛に張りし田を鋤き了へし嬉しさや牛と疲れて夕路を歸へる
宵々のしるき疲れも朝は癒ゆこの健やかさは吾れの者なり
麥刈のこのせはしさに一日野に妹を出して陽にやかしたる
さら／＼と柿の若葉の音たてゝそよぐ朝の空晴れにけり
榛の木のをよげる中に花つけし栗もそよげる山の明るさ

森 の 歌

佐 藤 正 美

陽のさゝぬ木立の道に霜とげず松の落葉は凍てつきて居り
早春の森のひそけきたま／＼に小雀の羽音芽えて聞ゆる
何鳥か窪地の森に遊び居り早春の空に聲のはるけき
あかときの雨の寂しさ我が屋外は小雀も鳴かず芽えかへりつゝ

雑草 双葉 清

大きな石の割目にさへ
青々と雑草がはびこつてゐる

その草でさへ しつかりと根を張り

自分をさへへてゐる

今朝は朝陽をいつばに吸ひ
輝やいてゐるのに この自分は……

無題

馬の目をみつめてゐると
なみだがにじんできると

虐げられ 虐げられし者の
よくもそれを噛み殺して生きて来た者の

悲そうな涙！

自分自身の生活を持たない者の

そして生をつながん爲の一切

いまは反抗の力さへも失ひ

たゞ老いばれゆく者の

自己哀憐の涙――

その涙がにじんでゐる

そしてその涙の中に私が立つてゐる

安息日の午后

藤村 青一

迷宮の窓牕から上半身を露現せる洋装のおばさんは
宿詩篇を讀んでゐる。

白孔雀のやうに浮腫んだ鳩尼の上で緑柱石の胸
飾と羊皮聖書とが占卜骨牌をしてゐるが、僕は梵
音に「チンモク」の電報を打ち童話から盗んだ邏羅
の象牙で體子を急襲するのだ。僕は僕を没却して
剪嵌細工を弄つてゐると頭上には殷紅い息吹が花
芯のやうに運動して僕の指尖で受精しさうであつ
た。

悉皆狼狽した僕は紅鸚鵡である、おばさんはお
ばさんの順に安置してある白蠟石の短艇を釣糸の
やうに下し僕を投載して引揚げて乳脂臭い蜜房へ
羽虫のやうに追ひ込んだ、此處では玻璃の壁に無
数の僕がメロンを聖饗してゐるので銃殺の脅嚇か

らはぐれ地帯にある一人の僕が言つた。

「おばさん、おばさん、僕の鏡身は瑛瑤質ですね」

おばさんは蜘蛛のやうに忙しい金齒で僕の脱奔を
封印し、さては暗紫色の窓牕で冬日を截断するの
であらう。

時主が燔祭を報告する時刻は僕が金の銘首より
醒めた時刻であり、おばさんの「アアメン」と祈禱
つてゐるのが火てつた僕の耳朶へ水沫のやうに彌
撒かれてゐる。

走馬燈から逃れる

ふせ。まち。さようなら

勢山 索太郎

走馬燈は今、ふせまちで止つてゐる。

僕は栗鼠の様にまちの中に僕を投げ込んで思ひ切
つたスピードでそれを廻して見なければならぬ

1 廻り出したふせ。まち

2 土と砂とで街道が沙漠になつてゐるまち

3 紺青の空がだゞつ廣いたゞそれだけのまち

4 それに答へる緑素を忘れて来たまち

5 すべて白つぽい眞夏の風景のまち

6 まちから飛び出してまちを見守つてゐる僕

7 走り出した僕

僕は此のふせ。まちの走馬燈の止まらない中に
次の走馬燈をみつけないならぬ。で無けれ
ば、僕は又、走馬燈ふせ。まちを廻したくなるか
も知れない。

地獄の佛

神 白 敬

Kと云ふ狂婦が死んだ。われわれは彼女の狂人生
活を嘲笑ふ前に彼女のうめきを聴こう。……

こうした佛も居た。

私は何故こんな地獄に來たか？

それは來なければならなかつたから……

私は狂人でしたよ

狂人とは思ふまゝを振るもうて

それで社會は發狂と云ふ名のもとにゆるすことな
んだよ

私は毎朝イヤ日中でも思ひ付けば社の太鼓を鳴らして祈つたよ、何故祈つたか

それはあの無感覚の息子を見るがいい

あゝ私はあれを無感覚と呼んでよいのか

あんなにまじめに勞いてくれた息子を

あれは働けないんじゃない

勞かせなくしたものであるのだ—女だ！

しかも親と云ふ名のつく私には

あれの心は慰め得なかつたのだ

あれはどれ程一人前の人間としての努力を求めたことか

それを出来得ぬ自己の白痴らしさに

あれは勞く氣力を失つたのだよ

それが何故出来なかつたか

それは一九三一年の生活マーチを聞きなさい

そして私は踊つたよ 生野菜も上げたよ

私は自分の信じてる事を

信ずるがままに現すことが

一番よい信仰だと思つたのです

だが矢張り氣力を失つた息子でした。

そして私は
地獄に送られた佛でした。

K への或夜のたより

光 山 禮 一

今晩は風の無い静かな晩だ、K 兄——僕は今。

腹を立てながら「記憶に甦るかす／＼の思ひ出に

花束を添へて、われはこの詩を彼女に贈る」と。

冒頭して書いた長い詩の原稿を、鉄でめちやめち

やに切りさいなんである。

前の晩、床のなかで闇に狂ふ風の叫喚を聞きながら

「戀！そんなはない慌しいものはお前の感情

から吹きッとはし」

と、繰返し繰返ししてわれとわが心に云つてき

かして自分をおもひだしたからなのである。

僕はさりさいなんだ詩の原稿を明日にでもなつ

たら鳥打帽のなかに入れて裏山にあげり、みんな

風にとばしてしまはうとおもつてゐる。

前にも云つたやうに、今晩は風の無い静かな晩

だ、チヨキチヨキ、鉄の音のみがめうに淋しい。

信仰て云ふ事は
金持の人々が精神修養の道具につくつたものだ

私達にとつては

狂人と云ふ汚名を着せるだけなんです

私は何んで狂人になる事を喜びませう

眞實の道と

眞實の祈りと

それを神は何等の形式で

パンにうめる私達に與へ下さることを

私は信じたからです

だがそれは

虚飾ある社會での狂態でした

でも眞實に生きようとする私の

死境までの努力でした。

では私達の眞實は何處にあんです

あの洪水をこらんなさい

人生の濁流におし流される無数のかげを

あれが現家の矛盾を叫ぶ人にです

そして人生の畸形兒なんです

形式の理論

——一九三〇・十二月の或夜——

頭蓋骨のない窓

片 寄 歌 二

窓・窓・窓——窓は深淵の岸で、セメントの垂

直の中で、ちつとしめられて生きてゐる、氷に閉

された蟹工船のやうに、空の際、人間の傍近く。

しかも何ものをも見ることなく。太陽は残忍にも

窓に對した石灰の白壁の上に、窓を通して慘酷な

る映像を取つける。夕暮毎に、黄色のらんぶは。

悲しげに、太陽のない東洋の方にこの映像を送り

還す

矩形の光——朝に磔刑となり、夕暮に屋根にひ

つかゝり、らんぶは消え、映像はなくなる、そし

て天井に緑の窓のぼつとした形を顔はせる。沼は

基盤縞を、水溜りは窓の横木を、夜は自動車のラ

イトを、道を急ぐ旅人が、死せる壁の上に速力が

歪んだ矩形を投げつけ、彼等は離及して行く。

窓は、頭蓋骨のない骸骨、眼を失つた肉体、泡

のやうな幽霊に過ぎない。

後記的言葉

本輯をもつと早く出す豫定であつたが、色々な事情で遅れて申すことがない、遅刊に就いて非難を聴いたが、いづれも極めて末しよう的な個性からくる見解の相違で我々はそれらの言葉をまつ殺すに躊躇しない

ともあれ一九三一年に生き伸びてゐる詩南車の雄々しき存在を見よ

「詩南車」の「詩」は所謂ホエムを意味しない、それは藝術といふ意味に解すべきだ

世界の文化藝術が一聯の關係に立つと同様我々の藝術も相關々係を持つ、それらがあらゆる交流と衝激に依つて我々の藝術をして大々的な獨白の境地に向はしめるのである

「詩南車」はかかる立場に立つて出發してゐる

本輯に比較的多数の原稿を載せた、これではレベルをセテラせたくない、發達の道程は質と量に我々は目的意識を置く

高久、森田兩氏の他に新しく永山、新妻兩氏の寄稿を受けた、有難い事だ、その他の諸氏の原稿も皆力作ばかり、大いに檢とう味はつて欲しいものだ

「詩南車」を今少し文壇的意義あらしめる爲めに、組織立つた研究會の様なものを作つて批判して見る、本輯が出ると直ぐ徹す積りだから通知あり次第出席して忌憚なき批判を聞きたいものだ

新らしく佐藤(正)君を迎へる

詩南車同人

宮田 青波 島本 眞之
佐藤 義家 駒木 根忠
明石 濱男 佐藤 正美
双葉 清 片寄 耿二

原稿募集

詩 短歌 俳句 創作 評論 以上必らず原稿用紙使用の事
短歌に限り平町田高久氏宛の事

原稿締切二月末日迄 次號四月發行

昭和六年一月廿日印刷納本

定価拾五錢(送二錢)五〇〇部發行

編輯兼 福島縣平町五丁目廿八番地

發行人 片寄 耿二

印刷者 川崎 文治

印刷所 福島縣平町長崎町廿五番地

發行所 福島縣平町 詩南車

店次取
平町各書店にあり
佐藤書店(郡山) 鈴木屋書店(若松)
西澤書店(福島) 金港堂(仙臺)
丸善書店(仙臺) 平町書店(水戸)
青山書店(名古屋)

二月下旬
会場ムシマホギン

詩南社ヴァラエティー

文藝講演
劇
脚本朗讀
詩朗讀
歌朗詠
音樂

會場。詩歌句展開催

色紙
短冊
各種

壽

坂本紙店

電話 一八八番
振替東京六六一七番

ヨウ! モーダン!
いゝ服を求めたね
斷然三一年型だよ
いやコレカネ
例の……「ソレ」



六三四電通場車停目丁四町平

正札堂

1 2 3 4 5 6 7 8 10

K. K A M A Y A

目 科 療 診

内 科、小 兒 科、婦 人 科
外 科、耳 鼻 咽 喉 科
皮 膚 病、花 柳 病 科
レ ン ト ゲ ン 科

院 長 醫 學 士 高 久 忠
副 院 長 新 潟 醫 學 士 赤 羽 清
藥 局 長 藥 劑 士 佐 竹 菊 雄

宅 診 午 前 — 往 診 午 後

平 町 田 町 六 十 四 番 地

高 久 病 院

電 話 五 一 三 番

【 頒 價 拾 五 錢 】